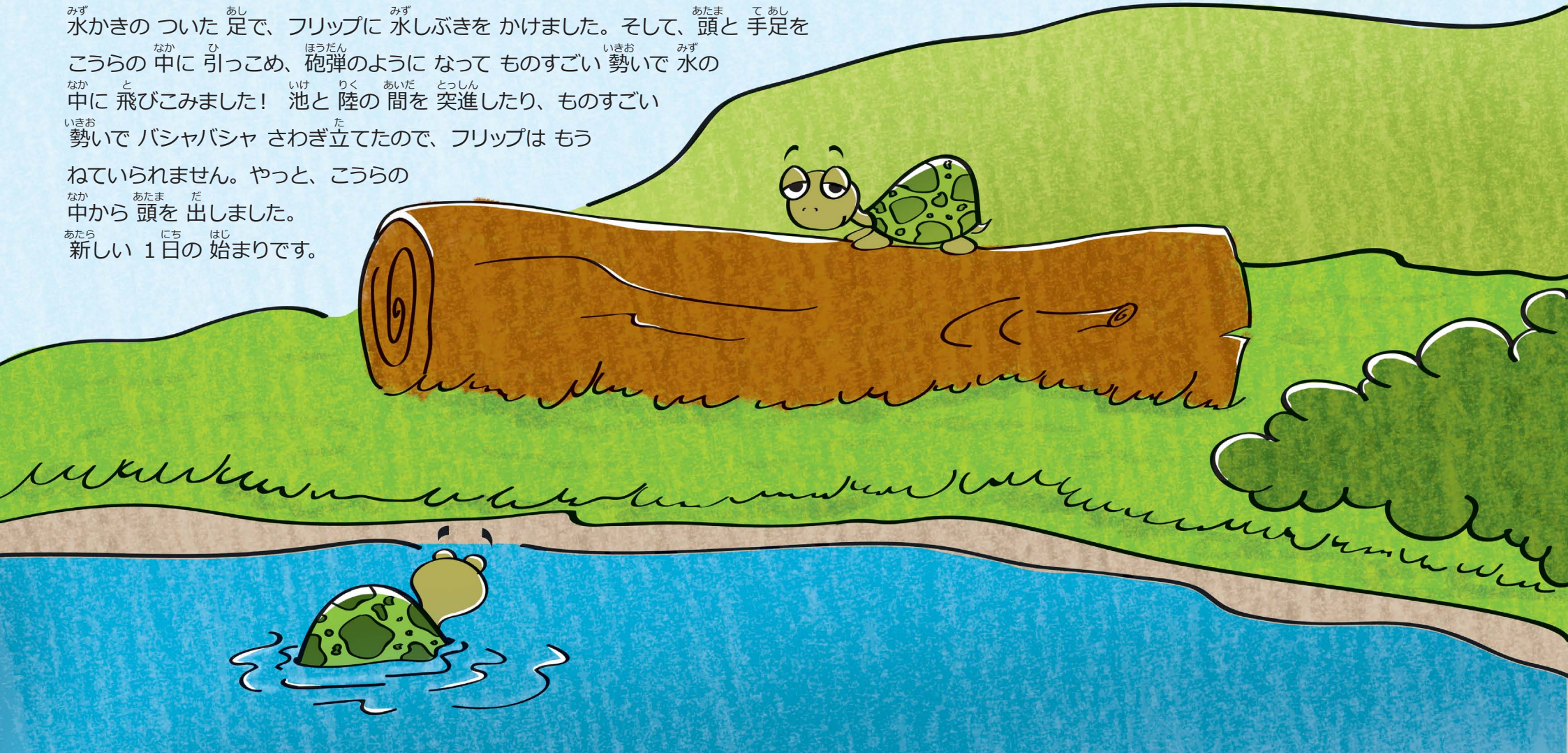
2ひきの カメの お話

池の 水面に、水中から 小さな あわが プクプクと 上がってきて、パチンと はじけました。カメの フロップが 水中から 頭を 出し、息を 深く すうと、辺りを 見渡しました。

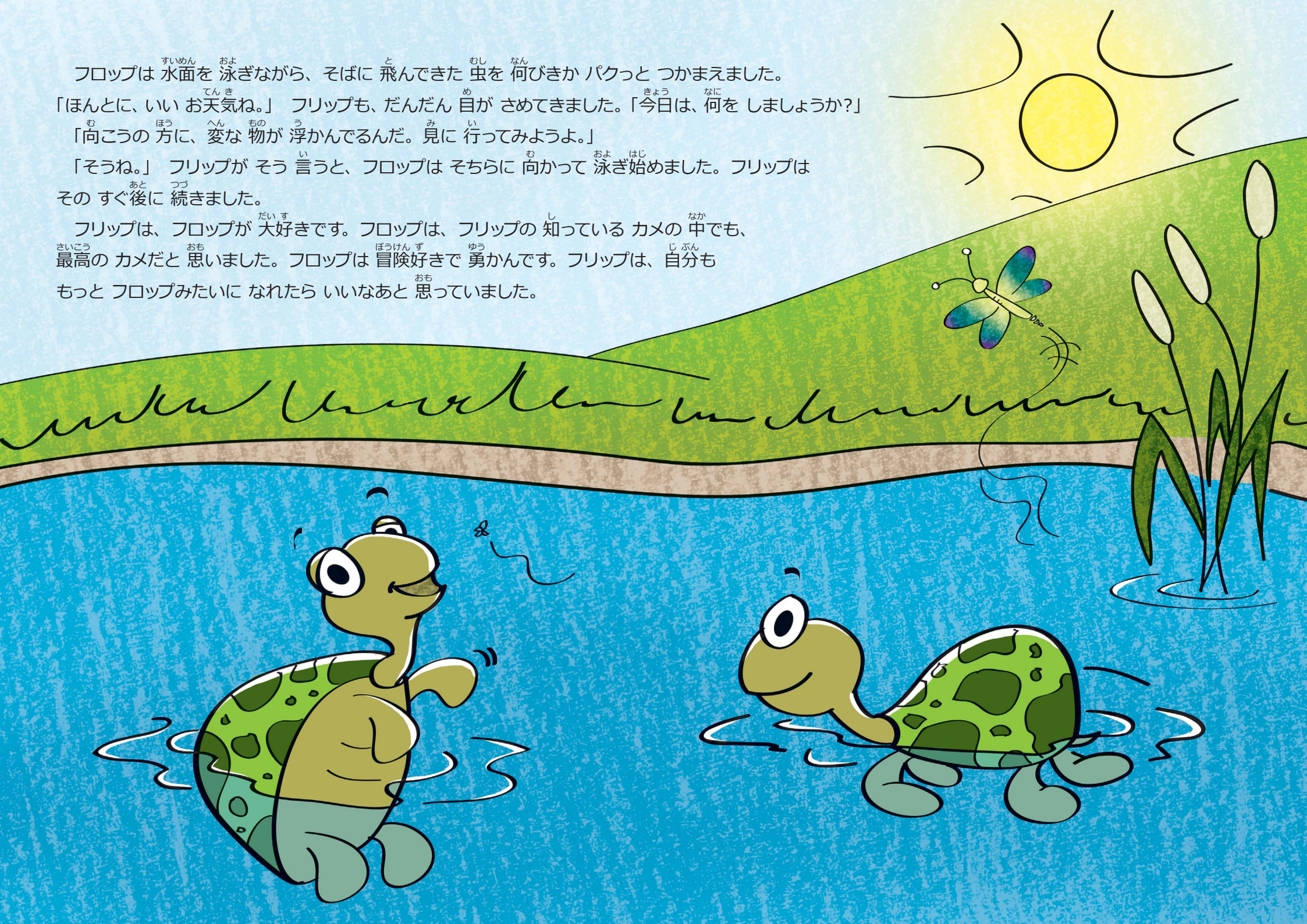
「ねえ、すごく いい お天気だよ！」 フロップは、陸で 休んでいた 親友の フリップに 声を かけました。

フリップは ねむたそうですが、フロップは 遊びたくて しょうが ありません。フロップは 水かきの ついた 足で、フリップに 水しぶきを かけました。そして、頭と 手足を こうらの 中に 引っこめ、砲弾のように なって ものすごい 勢いで 水の 中に 飛びこみました！ 池と 陸の 間を 突進したり、ものすごい 勢いで バシャバシャ さわぎ立てたので、フリップは もう ねていられません。やっと、こうらの 中から 頭を 出しました。

新しい 1日の 始まりです。



フロップは 水面を 泳ぎながら、そばに 飛んできた 虫を 何びきか パクっと つかまえました。
「ほんとに、いい お天気ね。」 フリップも、だんだん 目が さめてきました。「今日は、何を しましょうか?」
「向こうの 方に、変な 物が 浮かんでるんだ。見に 行ってみようよ。」
「そうね。」 フリップが そう 言うと、フロップは そちらに 向かって 泳ぎ始めました。フリップは
その すぐ後に 続きました。
フリップは、フロップが 大好きです。フロップは、フリップの 知っている カメの 中でも、
最高の カメだと 思いました。フロップは 冒険好きで 勇かんです。フリップは、自分も
もっと フロップみたいに なれたら いいなあと 思っていました。



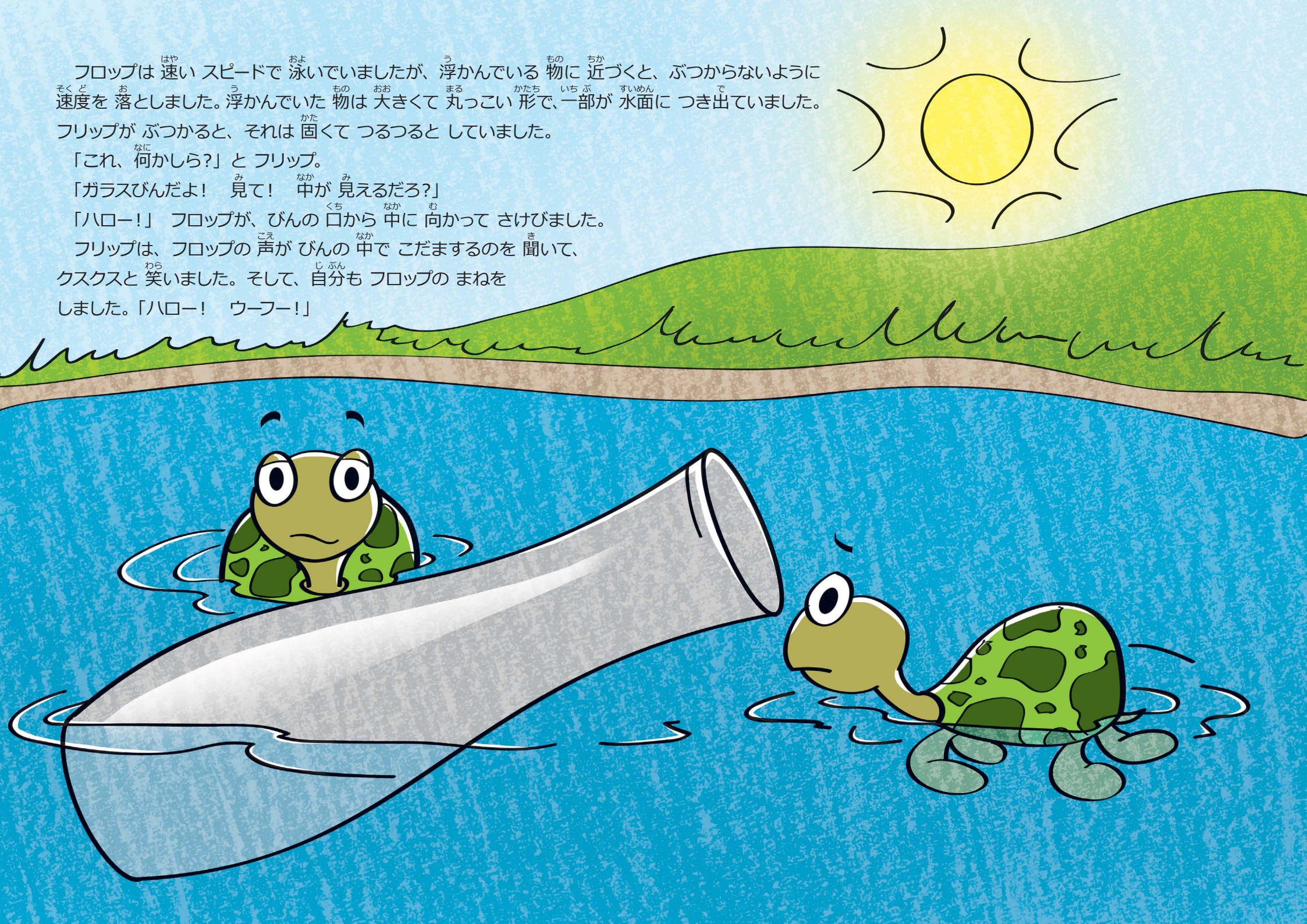
フロップは 速い スピードで 泳いでいましたが、浮かんでいる 物に 近づくと、ぶつからないように速度を 落としました。浮かんでいた 物は 大きくて 丸っこい 形で、一部が 水面に つき出ていました。フリップが ぶつかると、それは 固くて つるつると していました。

「これ、何かしら?」と フリップ。

「ガラスびんだよ!　見て!　中が 見えるだろ?」

「ハロー!」 フロップが、びんの 口から 中に 向かって さけびました。

フリップは、フロップの 声が びんの 中で こだまするのを 聞いて、クスクスと 笑いました。そして、自分も フロップの まねをしました。「ハロー!　ウーフー!」



「中に 入ってみようよ。」と フロップ。

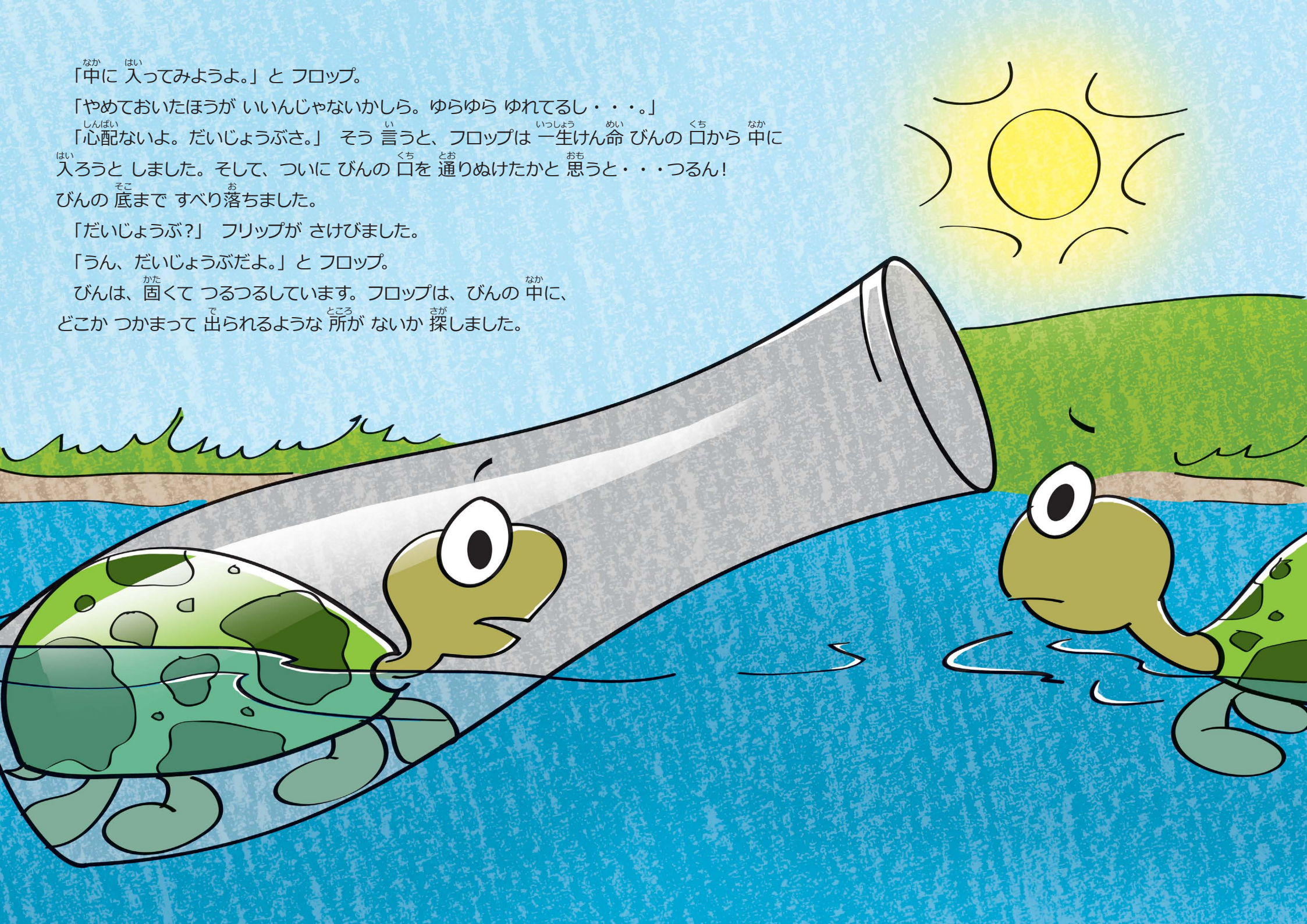
「やめておいたほうが いいんじゃないかしら。ゆらゆら ゆれてるし・・・。」

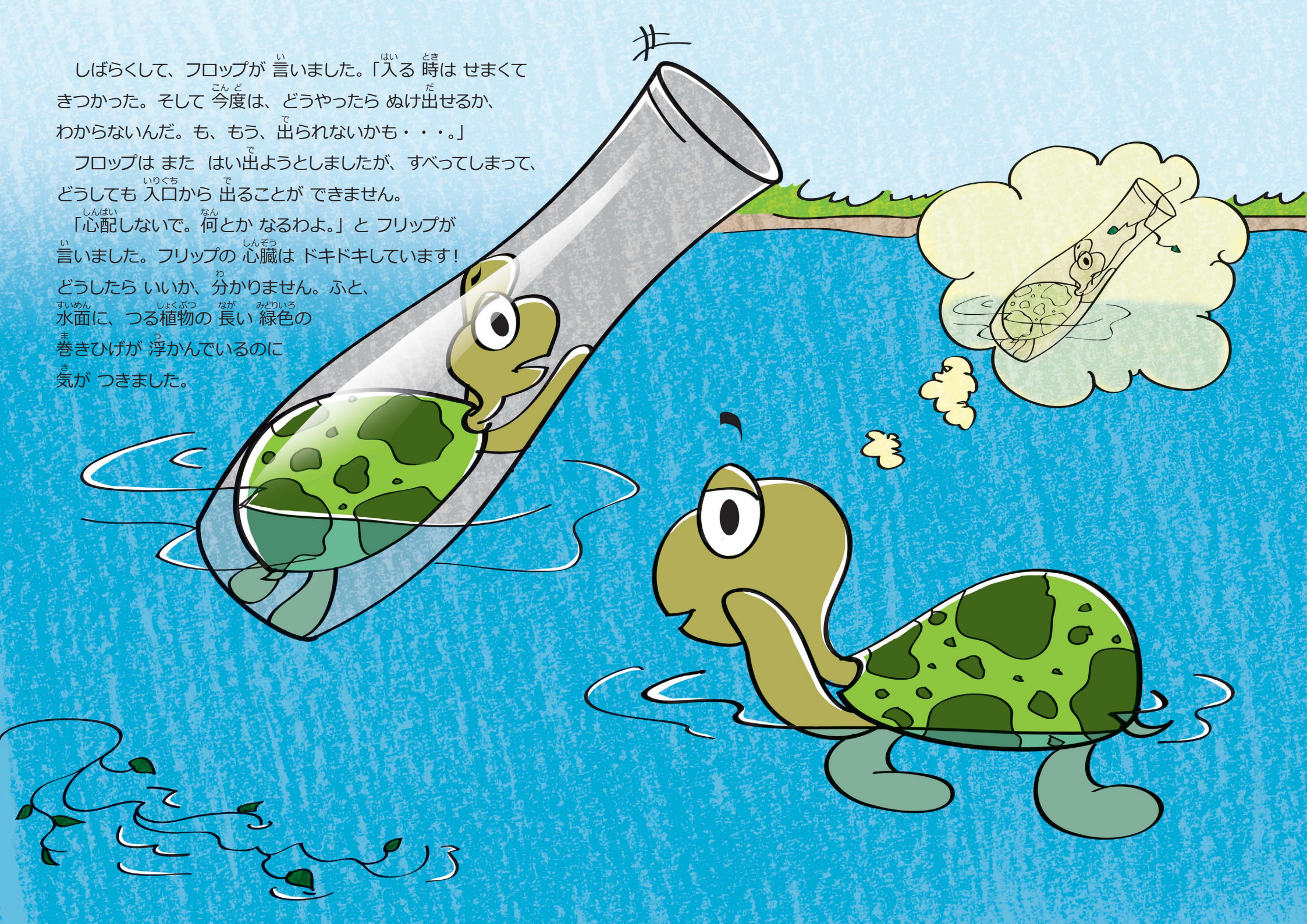
「心配ないよ。だいじょうぶさ。」 そう 言うと、フロップは 一生けん命 びんの 口から 中に 入ろうと しました。そして、ついに びんの 口を 通りぬけたかと 思うと・・・つるん!
びんの 底まで すべり落ちました。

「だいじょうぶ?」 フリップが さけびました。

「うん、だいじょうぶだよ。」と フロップ。

びんは、固くて つるつるしています。フロップは、びんの 中に、
どこか つかまって 出られるような 所が ないか 探しました。





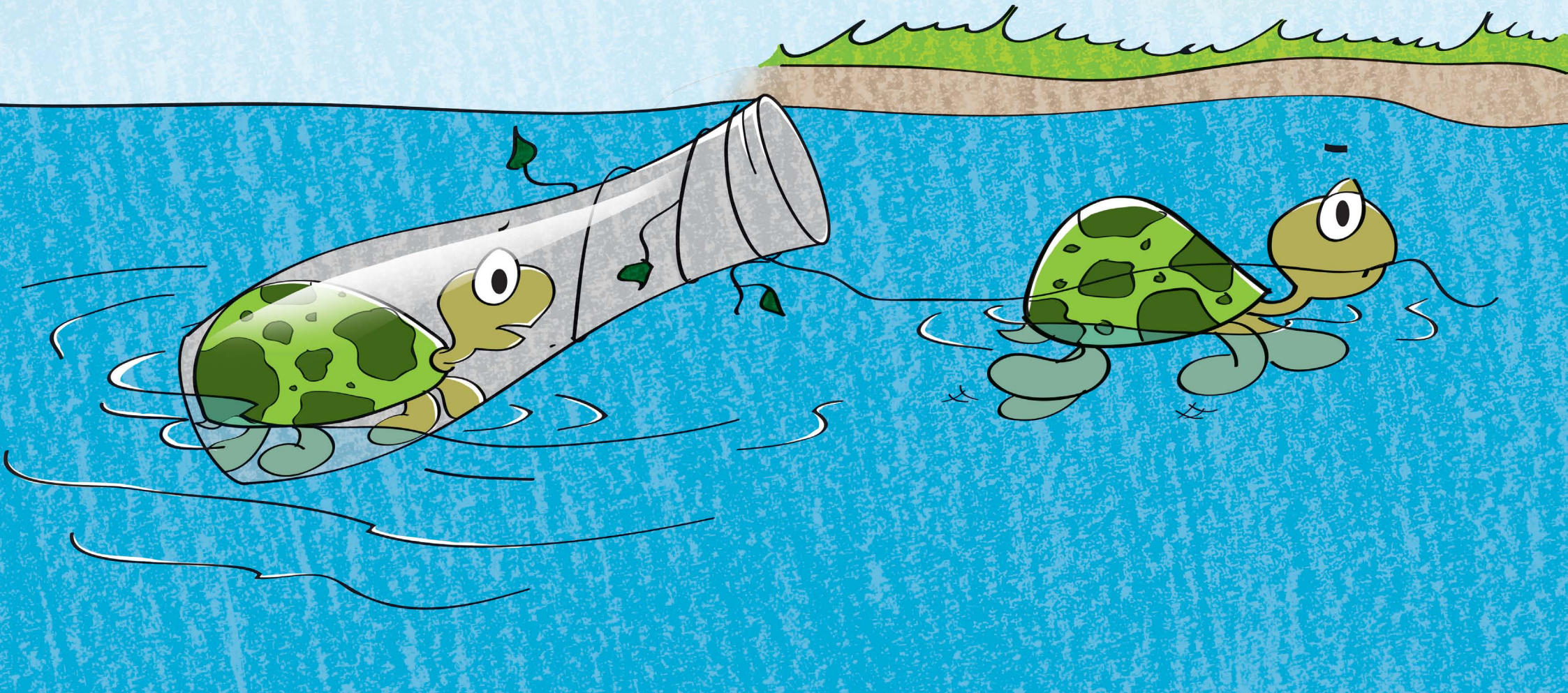
しばらくして、フロップが 言いました。「入る 時は せまくて きつかった。そして 今度は、どうやったら ぬけ出せるか、わからないんだ。も、もう、出られないかも・・・。」

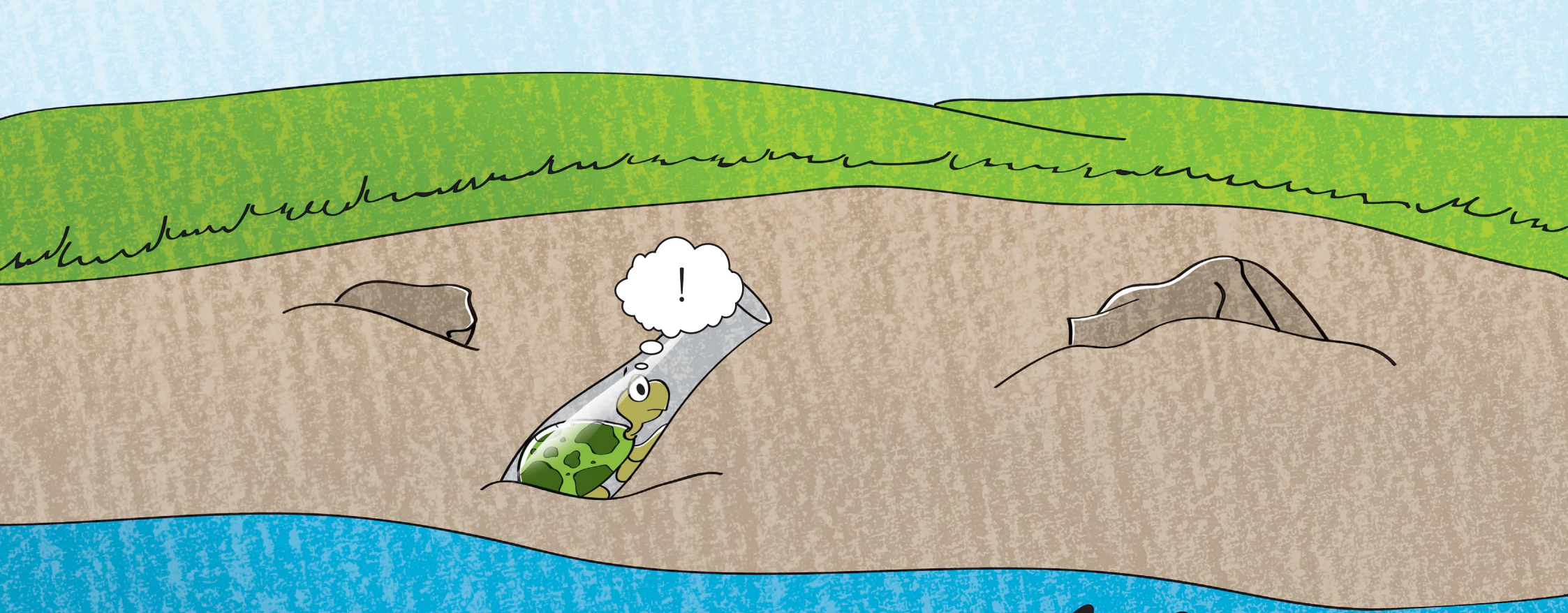
フロップは また はい出ようとしましたが、すべってしまって、どうしても 入口から 出ることが できません。

「心配しないで。何とか なるわよ。」と フリップが 言いました。フリップの 心臓は ドキドキしています！どうしたら いいか、分かりません。ふと、水面に、つる植物の 長い 緑色の 巻きひげが 浮かんでいるのに 気が つきました。

（もしかしたら、役に 立つかも。） フリップは 巻きひげを かみ切って、びんの 方に 泳ぎながら ぐいっと 引っ張りました。そして、びんの 周りをできるだけ 速く 泳いで、長い 巻きひげを びんに 巻きつけました。それから巻きひげの はしを くわえると、びんを 引っ張りながら 陸の 方へ 泳いで行きました。それは 大変な 作業で、あごも いたくなりましたが、フリップは 何としてでも友だちを 助けようと、一生けん命です。

ついに、フリップは びんを 引っ張りながら、陸に 上がりました。びんは水から 引き上げられ、砂の 上に のっています。



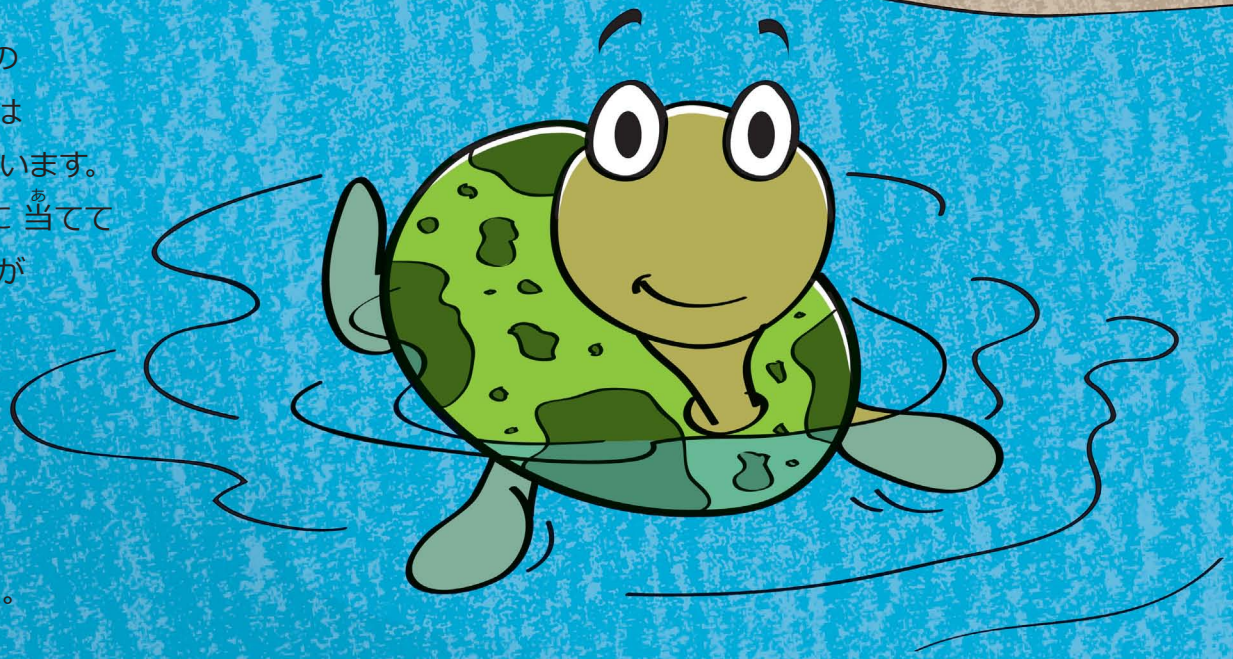


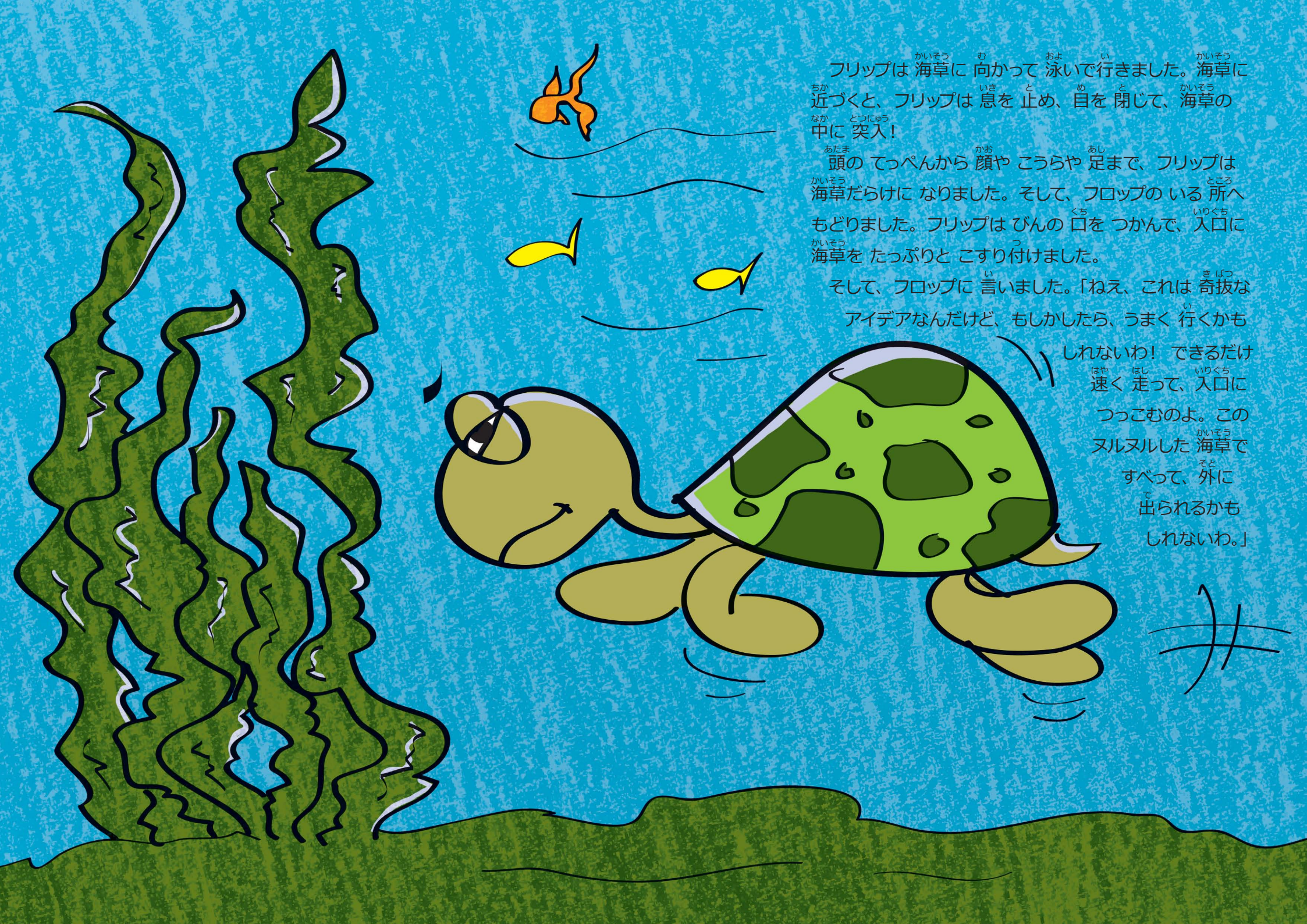
フリップは 巻きひげを パッと おろすと、すぐさま フロップの様子を 見に、かけ寄りました。だいじょうぶです！　フロップは びんの 底で 身を かがめながら、外の フリップを のぞき見ています。

フリップは 考えました。（土手の 上の 石を 転がして、びんに 当てて割ったら どうかしら。いや、だめだわ。それじゃあ、フロップが ケガを するかも しれないもの。いい 考えとは 言えないわ！）

ほかの 考えが 思い浮かびました。「池の 北側に 泳いで 行って、何か 取ってくるわ。すぐに もどるわね。」

（池の 北側だって？　どうして 行くんだろう？　そこには ヌルヌルした 海草が 生えているよね。いつもは そこには 行かないように してるんだけどな。）と フロップは 思いました。



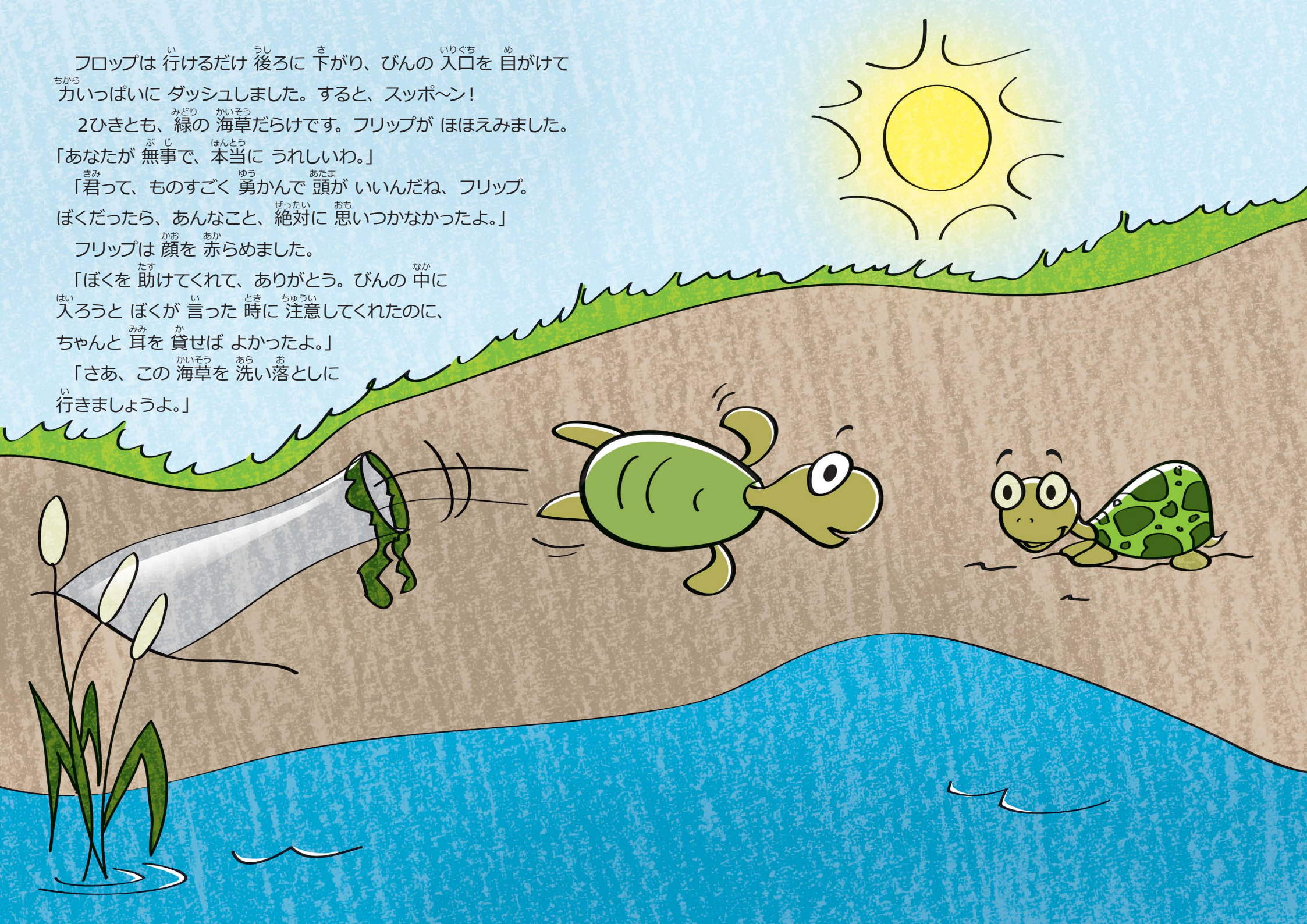


フリップは 海草に 向かって 泳いで行きました。海草に近づくと、フリップは 息を 止め、目を 閉じて、海草の中に 突入！

頭の てっぺんから 顔や こうらや 足まで、フリップは海草だらけに なりました。そして、フロップの いる 所へもどりました。フリップは びんの 口を つかんで、入口に海草を たっぷりと こすり付けました。

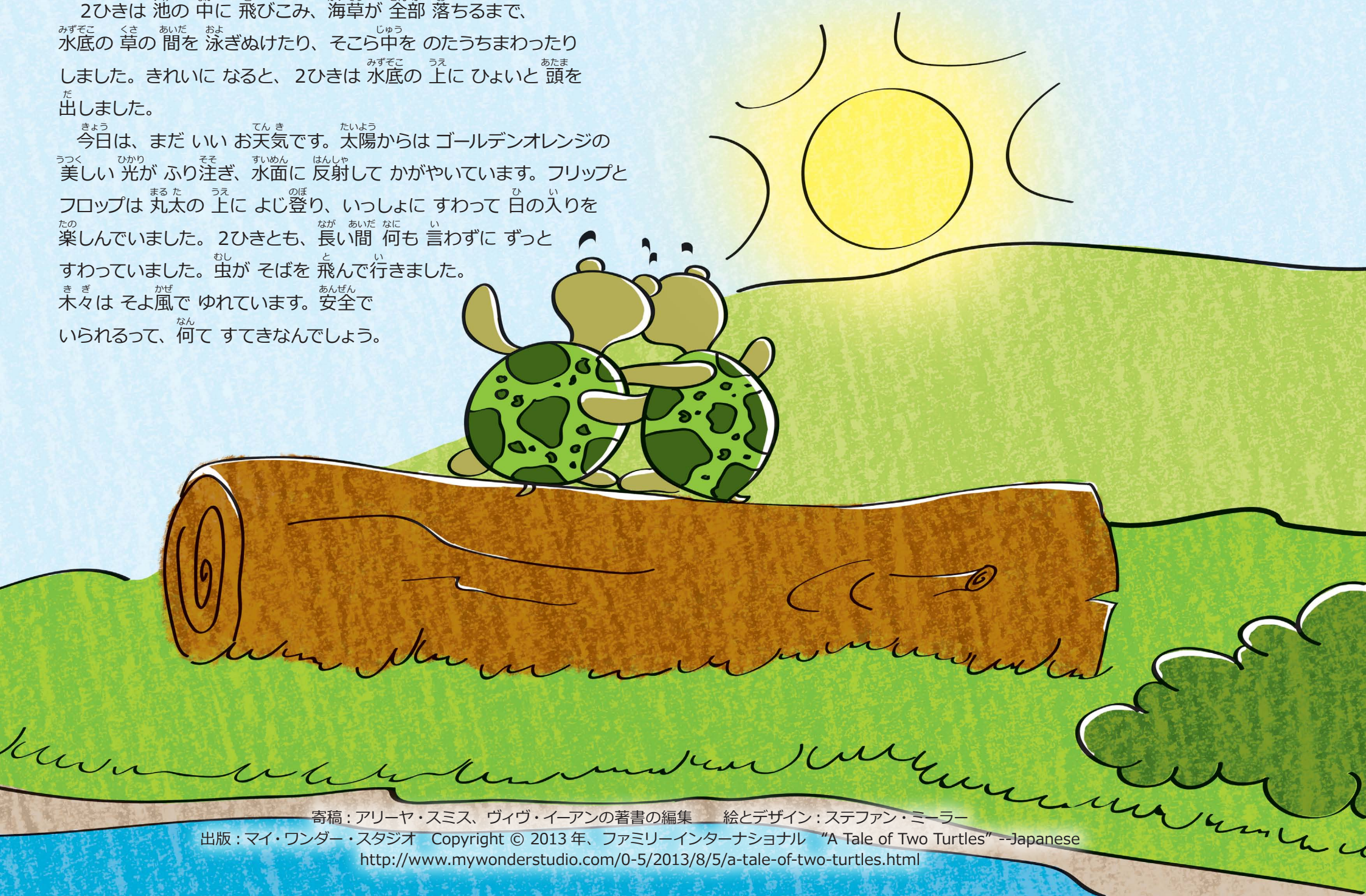
そして、フロップに 言いました。「ねえ、これは 奇抜なアイデアなんだけど、もしかしたら、うまく 行くかもしれないわ！ できるだけ速く 走って、入口につっこむのよ。このヌルヌルした 海草ですべって、外に出られるかもしれないわ。」

フロップは 行けるだけ 後ろに 下がり、びんの 入口を 目がけて
力いっぱいに ダッシュしました。すると、スッポ〜ン！
2ひきとも、緑の 海草だらけです。フリップが ほほえみました。
「あなたが 無事で、本当に うれしいわ。」
「君って、ものすごく 勇かんで 頭が いいんだね、フリップ。
ぼくだったら、あんなこと、絶対に 思いつかなかったよ。」
フリップは 顔を 赤らめました。
「ぼくを 助けてくれて、ありがとう。びんの 中に
入ろうと ぼくが 言った 時に 注意してくれたのに、
ちゃんと 耳を 貸せば よかったよ。」
「さあ、この 海草を 洗い落としに
行きましょうよ。」



2ひきは 池の 中に 飛びこみ、海草が 全部 落ちるまで、
水底の 草の 間を 泳ぎぬけたり、そこら中を のたうちまわったり
しました。きれいに なると、 2ひきは 水底の 上に ひょいと 頭を
出しました。

今日は、まだ いい お天気です。太陽からは ゴールデンオレンジの
美しい 光が ふり注ぎ、水面に 反射して かがやいています。フリップと
フロップは 丸太の 上に よじ登り、いっしょに すわって 日の入りを
楽しんでいました。 2ひきとも、長い間 何も 言わずに ずっと
すわっていました。虫が そばを 飛んで行きました。
木々は そよ風で ゆれています。安全で
いられるって、何て すてきなんでしょう。



寄稿：アリーヤ・スミス、ヴィヴ・イーアンの著書の編集　　絵とデザイン：ステファン・ミーラー
出版：マイ・ワンダー・スタジオ　Copyright © 2013 年、ファミリーインターナショナル　“A Tale of Two Turtles” --Japanese
http://www.mywonderstudio.com/0-5/2013/8/5/a-tale-of-two-turtles.html